

魚と同じになるまでの子どもの魚。そのあとは稚魚（ちぎょ）という。サケは、仔魚の間は栄養のふくろをつけていてエサをとらず、稚魚になってからエサを食べるようになる。

自作農（じさくのう）：自分の土地を耕す独立した農民。

湿原（しつげん）：しめった場所に広がる草原。かれ草などが分解されにくく（土にかえりにくく）泥炭（でいたん）が得意やすい。

湿地（しっち）：しめった土地。

砂利（じゃり）：小石。小石の集まり。小石に砂が混ざったもの。

集落（しゅうらく）：数軒（すうけん）以上の家が集まって人々が暮らしているところ。アイヌ語でコタン。

しゅんせつ（浚渫）：水面下で水底や水底にたまったものをさらいとること。（ p211）

城柵（じょうさく）：7世紀から、大和朝廷（やまとちやうてい）が東北地方のエミシを支配し、和人を移住させるために設置した、柵（さく）や盛土（もりつち）などで守りを固めた役所。交易の拠点（きょてん）ともされたという。

浄水場（じょうすいじょう）：水を浄化（じょうか）：きれいにすること）して、暮らして使う水道の水（いわゆる水道水）とするところ。

縄文（じょうもん）：土器表面に縄（なわ）を転がすことでつけた文様（もんよう）：もよう）のこと。縄文文化の特ちょうだが、縄文時代が始まってしばらくは、土器に縄文が見られない。北海道では擦文文化（さつもんぶんか）に入ると、見られなくなる。

殖民地（しよくみんち）：開拓者（かいたくしゃ）が開拓をするための土地のことで、役所によって決められ、区分けされている。植民地（しよくみんち）とは異なる。

殖民地解放（しよくみんちかいほう）：開拓者（かいたくしゃ）に殖民地（しよくみんち）：開拓のための土地）貸しつけが始まること。十勝では明治29年（1896）から。

シルト：岩石がとて細かくなったもので、砂と粘土（ねんど）の中間くらいの粒子（りゅうし）の集まり。直径1/16mm～1/256mmのもの。

新水路（しんすいろ）：それまで水が流れていなかった場所に水を流すためつくられた水路。（ p190）

深成岩（しんせいがん）：マグマが地下でゆっくり冷えることによってできた岩石。火成岩（かせいがん）のひとつ。花こう岩やかんらん岩など。

針葉樹（しんようじゅ）：マツやモミなどの針のように細長い葉をもつ樹木。北海道の自然では高地など寒いところで見られる。

## す

水害（すいがい）：川の洪水（こうずい）や海の高潮（たかしお）などによって、人の暮らしがダメージを受けること。

水制（すいせい）：岸から流れの中に流れにくいもの（大型のコンクリートブロックやくいなど）をつき出すように置くことで、その場所の流れをおさえ、川岸がけずられるのを防ぎ、川が運ぶ土砂をため、流れを岸から遠ざける方法。（ p212）

スサム（アイヌ語）：シシャモのこと。「シシャモ」ということばは「スサム」からできた。スサムは「スス・ハム（ヤナギ・葉）」からきている。（ p119）

砂（すな）：細かい石。地質学では、岩がぐだけたもののうち直径2mm～1/16mmのものをいう。

## せ

生態系（せいたいけい）：生き物の集まりとその周りの環境が、つながりまとまっている様（系）：けい）。

石器（せっき）：石を加工してつくられた道具のこと。ナイフ、ヤリ先、ヤジリ（矢の先）、皮をなめすためのスクレイパー、キリ、すり石、石おの、漁網（きょもう）のおもりなど、さまざまな道具が、いろいろな技術によって作られている。

先史時代（せんしじだい）：文字による記録がない時代のこと。

扇状地（せんじょうち）：川の水は、流れが速いほど大きなれき（石）を運ぶことができる。山地の急流が平地に流れ出すと、流れがおそくなっていくため、それまで運んでいたれきを大きなものから置き去りにしていく。こうしてできたななめで、おうぎ形（扇形）に広がった平地を扇状地という。

扇状地面（せんじょうちめん）：扇状地の表面。段丘（だんきゅう）：段丘（だんきゅう）ができたあと、扇状地であったところがほとんどけずられずに残されてきた段丘面（だんきゅうめん）のことを、とくに分けて扇状地面ということがある。

## た

堆積岩（たいせきがん）：海底や湖底、あるいは地表にたまり重なったものが固まってできた岩石。

蛇行（だこう）：曲がりくねっていること。曲がりくねって進むことや流れること。

多細胞生物（たさいぼうせいぶつ）：細胞（さいぼう）がたくさん集まってひとつの体をつくっている生き物。人も犬もヤナギもタンポポもクワガタもカモ多細胞生物。単細胞生物（たんさいぼうせいぶつ）

館（たて）：14～15世紀に北海道南西部へ移住した和人がつくった、その地域（ちいき）の支配拠点（しはいきょてん）であり、交易拠点（こうえききょてん）であり、戦いの砦（とりで）となったもの。

竪穴式住居（たてあなしきじゅうきょ）：地面を数十cmほり下げた床（ゆか）（と壁〔かべ〕）にして、柱を立て、草や樹皮などの屋根をかぶせた家のこと。地面に対してタテに穴をほるため、「竪穴式」と呼ばれる。洞窟（どうくつ）など斜面やガケの横穴を利用した「横穴式住居」に対応した名前。北海道では縄文時代（じょうもんじだい）から、続縄文時代（ぞくじょうもんじだい）擦文時代（さつもんじだい）までつくられる。（ p85）

タフ（tuff・英語）：火山からふき出した火山灰が地上や水中にたまり積もってきた岩石。「凝灰岩（ぎょうかいがん）」。タモ網（タモあみ）：細い枝や竹、針金などの口輪がついたふくろ状の網（あみ）に柄（え）をつけたもの。虫取り網のようなもの。魚をすくい取るのに使う。

段丘（だんきゅう）：川の流れに対してだいたい平行にあり、ガケと平地でできている階段のような丘（おか）。川の流れの速さが速い時に川底を深くけずり、おそくなった時に横方向に谷を広げて平地をつくることのできる。（ p49）

段丘面（だんきゅうめん）：段丘（だんきゅう）の上にある平地。階段でいえば、足をおくところ。かつて川がその高さを流れていた時には、氾濫原（はんらんげん）だった場所。もともと扇

状地(せんじょうち)だった平地の場合は、「扇状地面(せんじょうちめん)」として分けることがある。( p49)

団体入植(だんたいにゅうしょく):近くに住む人たちが集まり、また、大きな農場にやとわれ(小作となり)、開拓するために集団で移住すること。( p166)

単細胞生物(たんさいぼうせいぶつ):生まれてから死ぬまで、ひとつだけの細胞(さいぼう)で体ができている生き物。多細胞生物(たさいぼうせいぶつ)

断層(だんそう):地層や岩盤(がんばん:岩の板)に力がかかって割れ、割れ目にそってずれたところ。これからも動く可能性がある断層を「活断層(かつだんそう)」という。

## ち

チェブ(アイヌ語):魚のこと。

稚魚(ちぎょ):すべてのヒレのスジの数が、成魚と同じになってから、ウロコができあがるまでの間の魚。その前は仔魚(しぎょ)という。

治水(ちすい):洪水(こうずい)による水害から人間の生命・財産・生活を守ること。おもに川自体や川にかかわる施設(しせつ)などを整備すること。( p211)

チセ(アイヌ語):家のこと。平地式住居。( p130)

チブ(アイヌ語):舟(ふね)、とくに丸木舟(まるきぶね)のこと。( p128)

チャシ(アイヌ語):アイヌ文化期につくられた、高台の地面に一本から数本のみぞ(壕:ごう)がめぐらしてあるところ。目的ははっきりとわかっていないが、伝承によると、戦いの時の砦(とりで)、カムイがやってくる場所、見張り場、話し合い(チャランケ)の場所、などとされている。1669年のシャクシャインの戦いの時、シャクシャインはシベチャリチャシ(新ひだか町静内)を砦として利用した。チャシのあとのことをアイヌ語ではチャシコツ(チャシあとの意味)といい、豊頃町の安骨(あんこつ)は元はチャシコツにあてた字だった。( p116)

柱状節理(ちゅうじょうせつり):節理(せつり)とは、ズレがないひび割れのこと。岩体が冷えて体積が収縮する時、このひび割れがタテに入ることで、岩が柱のように分かれる。この場合の割れ目を柱状節理という。層雲峡(そううんきょう:上川町)が有名だが、十勝でも、屈足(新得町)や黒石平(上土幌町)などの川ぞいで見ることができる。( p37)

徴兵(ちょうへい):国が国民を強制的に軍隊に入れること。( p196)

## て

泥炭(でいたん):湿原(しつげん)でかれた草などの分解がすすまず(あまり土にかえらず)、炭のようになっていったもの。石炭になり始めの段階。

堤防(ていぼう):川の堤防は、流れにそって土などを長く盛り上げ、川の水が増えても下流に流せるようにしたもの。( p211)

寺子屋(てらこや):江戸時代にあった、あまり身分が高くない人のための学校や塾(じゅく)のようなもの。武士・僧(そう)・医者などが先生となり、習字・読み方・そろばんなどを教えた。明治時代の十勝では、開拓地(かいたくち)にあった寺で僧が先生となって教育したところをいう。( p168)

## と

頭首工(とうしゅこう):川や湖などの水を用水路に引き入れるための施設(しせつ)。ふつうは、せき、取り入れ口、そしてそれともなう施設(しせつ)から構成されている。千代田堰堤(ちよだえんてい)は頭首工の一部にあたる。( p214・p194)

凍上抑制層(とうじょうよくせいそう):冬になると地面(の水分)がこおる。寒さがきびしいと地中までこおりつき、土の体積が大きくなることで地面が持ち上がり(凍上し)、道路の舗装(ほそう)などをこわす。そこで、道路工事などの時、寒くなくてもこおりつかない深さまで土をとりのぞき、水はけがよく、こおりつきにくいもの(火山灰や砂利〔じゃり〕など)を厚くしく。この層のことを凍上抑制層という。( p39)

十勝組合(とちかくみあい):明治時代に入り、開拓使(かいたくし)によって、それまでの交易や産業に対する商人による支配がなくなっていくが、十勝では支配がなくなることにより、道路や宿などの管理者がいなくなることで、アイヌ民族のかせぐところが失われ、さらに和人が漁場や山野に入ってくることで、アイヌ民族の暮らしが成り立たなくなることが予想された。そこで明治8年(1875)、開拓使の強いすすめにより、それまで支配商だった福嶋屋(ふくしまや)(杉浦家)の支配人である若松忠治郎(わかまつちゅうじろう)を中心にした和人6人とアイヌ民族7人を代表とする「十勝組合」がつくられ、十勝の産業(漁や狩り)と交易を管理、発展させた。実質的な活動は明治10~12年(1877~79)だったが、かなりの利益をあげ、福嶋屋杉浦家からの借りを返し、教育所を建て、病院新設にもお金を出し、残ったお金を代表13人と和人40人あまり、アイヌ民族277戸で分けた。この十勝組合の発展を知った和人が、十勝での漁や狩りの解放を求め、また、交易や密猟(みつりょう)をおこなうためやってくるようになった。十勝組合は明治13年(1880)に解散した。( p145)

土器(どき):粘土(ねんど)をこねて形にし、火で焼いて作ったナベやカメなどの器(うつわ)のこと。土器が使われるようになって縄文文化(じょうもんぶんか)に入る。表面に付けられた文様(もんよう:もようのこと)や形は時代や時期によって変化する。北海道では擦文時代(さつもんじだい)まで使われ、アイヌ文化になって使われなくなる。

土偶(どぐう):人の形をした土製の焼き物。( p95)

渡船(とせん):橋がないところで川をわたるための舟(ふね)。人とちょっとした荷物が乗るくらいのものから、自動車やバスを運んだものまでいろいろある。渡し舟(わたしぶね)ともいう。渡船の舟着き場(ふなつきば)を渡船場(とせんば)という。( p176)

砦(とりで):外敵から大切な場所を守るためにつくる構築物。

## な

ナイ(アイヌ語):川のこと。厚内(あつない)・札内(さつない)・糠内(ぬかない)・長流枝内(おさるしない)・新内(にいない)などの「内」は、この「ナイ」にあてた漢字。( p127)

## に

二級町村(にきゅうちょうそん):町村長は国から任命されるが、